

道 特 P 連 会 報 第 75 号

令和 7 年 (2025 年) 3 月 3 日発行

北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会

(事務局) 〒005-0011 札幌市南区真駒内東町 2 丁目 2 番 1 号

北海道真駒内養護学校 TEL : 011-581-1782 / FAX : 011-581-1892

(発行責任者)

北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会事務局長 高 木 美 穂



組織の発展を願って

北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会 会長 北 條 俊 介
(北海道真駒内養護学校 PTA 会長)

会員の皆様におかれましては、いつも本協議会のさまざまな活動に対し、深いご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。

昨年度より本会の会長をさせて頂いておりますが、本年度もさまざまな教育関係の会議に参加させていただきました。どの会議でも、どうしたらいい教育ができるのかと真剣に議論がされており、そこでの内容はもっと多くの保護者に知っていただきたいと思いました。関係者の皆様は熱い思いをもって、私たちの子どもに教育をしていただいているのだなとしみじみと思いました。

昨今 PTA 組織の存在意義が問われている中ではありますが、学校はできることとできないことがあるため、学校をサポートする意味でも PTA 組織は必要不可欠であると感じております。合同大会の講演で、酒蔵の復活と地方創生を果たした大変貴重なお話をいただきましたが、同様に、いろんな方が手を結んで子どもを大事に育てるという心をつにして考え活動することで、にぎわい豊かな地域が再生する可能性があるのではないかと思います。これからも微力ではありますが子どもたちのために尽力させていただきます。ただこうと思います。

さて、今年度の第 24 回合同大会（石狩西部・後志大会）は、完全オンラインで開催されました。参集なしに、主管校からの配信を中心とした大会は、遠隔地からの移動の負担や学校の負担を少なくして開催できることを経験させていただきました。画面からは見えない部分で、主管校・主管地区の教職員と保護者の皆様の念入りな準備やご苦労があったのだと思いますが、進行もスムーズで、今後同様の形式であればどの地区が担当になっても無理なく運営できるのではないかと思います。運営関係者の皆様のご尽力に、心より感謝申し上げます。

また、役員会では、今後の大会の在り方や会の名称などについて、総会での皆様からのご意見を持ち帰った内容を、改めて協議してまいりました。これまでの会の歴史と果たしてきた役割を再確認し、継承する部分は継承し、変更すべき部分は変更する案を 5 月の総会で提案することとなりました。皆様からの賛同を得ることができれば幸いです。

最後になりますが、本協議会並びに各特別支援学校の PTA、関係教育団体の今後の一層の発展を願い、巻頭のご挨拶とさせていただきます。

合同大会 障がい種別分科会報告

視覚障がい分科会

【司会者】

秋山 卓也（札幌視覚支援学校 副校長）

【助言者】

迎 晶子（道立特別支援教育センター教育課
視覚障がい教育室長）

【運営者】

皆月 邦夫（札幌稲穂高等支援学校 教諭）

【記録者】

成田 和夏奈（札幌稲穂高等支援学校 教諭）

■提言

【提言①】

「旭川盲学校 PTA 研修について～道内盲学校と連携したこれからの PTA 活動の在り方～」

旭川盲学校 PTA 会長 武田 香織

旭川盲学校 PTA は、会員数の減少などの課題に直面しています。これまで、外部講師の活用を含めて視覚障がいに関する様々な研修を実施し、保護者からの評価も高かったものの、幼児児童生徒の多様化や人数の減少により、研修内容や頻度について見直す必要があります。そこで、道内の他の盲学校の PTA の活動事例を参考に、オンラインを活用した道内合同の PTA 研修会の実施も考えたいと思っています。各校が持ち回りで研修会を企画し、保護者同士の情報交換や悩みを共有できる場を設けることで、より充実した PTA 活動となるのではと考えています。

【提言②】

「PTA 活動について～PTA 研修の成果と課題～」

帯広盲学校 教諭 蜂谷 有希子

帯広盲学校 PTA は、小規模ながら活発に活動しており、特に昨年度実施した卒後の進路を考える研修では大きな成果がありました。研修会では、卒業後の生活をイメージできるよう様々な福祉施設を訪問しました。成果として、保護者が子どもたちの将来について具体的に考えるきっかけとなったこと、卒業後の進路に向け保護者と教職員が一緒に考え計画を立てることができるようになったこと、などが挙げられます。今後は、実際に働いている方の姿を見て、より具体的なイメージを持ってもらえるよう、昼食を挟みより時間をかけて作業所を見学するなどの工夫をしたいと考えています。

■協議

【協議の柱①】

「道内盲学校・視覚支援学校の持続可能な PTA 活動

の在り方について」

- 卒業後の進学先について心配している保護者も多くいることから、近隣の特別支援学校などや事業所の見学に行ってきました。
- 保護者同士の交流は良いと思います。どの親にとっても子育ては大変であることから、交流というのはとても良いテーマであると考えます。
- 高等部生徒の保護者は遠隔地に居住しているため PTA 活動への参加が少ない状況です。卒業後、福祉的就労を選択する場合は地元へ帰ることが多いため、義務段階で施設見学等を行うことは大切と考えます。

【協議の柱②】

「道内盲学校・視覚支援学校の PTA 活動における研修と協力について」

- 函館では、講演会や体験会など、テーマを決めたものを行ってほしいという意見があります。寄宿舎生が少ないことから、他校と曜日を調整して合同の研修ができると考えています。
- 帯広では、子どもの数も少なくなり、すぐに改善することは難しいと思うが、少ない人数のなかでも各校が効果的に無理なく交流し、細くても続けていくことが大切と考えています。
- 札幌では、次年度フロアバレーボールの全国大会を主管することから、保護者にも知っていただく機会とするため体験会を行いました。他校の保護者にも興味を持っていただきたい。
- 旭川では「おやじの会」があり父親の協力も得ています。他 3 校では父親の会はないが、父親の参加状況について聞き取りを行い、情報交換を行いました。
- 4 校の距離がそれぞれ離れていることから、研修の実施などにおいて協力するといった場合はオンラインを活用していくこととしたいと考えています。

■助言

迎 晶子 氏より

武田さん、蜂谷教諭お二人の提言から、視覚障がいのある子どもたちの健やかな成長には、家庭・学校・地域が協力し、教育の責任を共有し、力を合わせて子どもたちの幸せのために努力していくことが大切だと言えます。他校の実践などからは、先輩保護者との交流や多様な体験の機会 PTA 研修などを通じて提供していくことも重要です。PTA 活動そのものは、現在の時代の変化に合わせて見直し、持続可能な活動を目指すべきとも考えられますが、一方で保護者が地

域社会との連携を深めることで、子どもたちが安心して暮らせる環境づくりに貢献できるといった体験が、見えない・見えにくい子どもたちを育てる方へのメッセージとして保護者の体験が書かれた書籍に述べられています。視覚障がいのある子どもたちの教育において、学校と地域が協力し、何をすべきなのか、何を実現すべきなのか、課題や目標を共有していくこと、それを自分ごととして捉え、全保護者が学校のパートナーとして参加しやすいように情報を発信していく必要があると考えます。

聴覚障がい分科会

【司会者】

鎌田 隆仙（旭川聾学校 教頭）

【助言者】

深町 友祐（道立特別支援教育センター教育課
聴覚・言語障がい教育室長）

【運営者】

三林 礼治（高等聾学校 主幹教諭）

【記録者】

阿部 敏光（高等聾学校 教諭）

■提言

「PTA として子どもたちにできること」～小規模校ならではの取組について～

帯広聾学校 PTA 会長 山口 千鶴
娘が年少の頃と比べ、子ども・保護者の人数は減ってきており、休止となった活動が増えてきた。コロナ禍による PTA 活動の中断を経て、今、活動の転換期を迎えている。

PTA 会長として活動の進め方に迷いはあったが、役員の皆様と一緒に考え、無理のない運営を進めている。例えば、PTA 交流会は、放課後に親子と先生方とのミニバレー大会を開催し、終了後に簡単な調理を交えて交流を図った。体を動かすことで和やかな雰囲気生まれ、保護者・先生方の普段以上に充実した交流となった。PTA 研修会は、学校運営協議会の委員の協力により、地域の短大や成人のろう者が働く職場の見学などを実施した。平日の日中に開催し、負担なく参加いただくことができた。運動会後の「お疲れ様会」は、レストランを会場に、多くの親子と先生方が参加し大変盛り上がった。夕方以降に実施し、運動会で分かち合った喜びそのままを本会で共有し、保護者・教員との関係づくりの一助となった。

保護者には様々な事情、考えがあり、全ての思いに応えることは難しいかもしれないが、学校と保護者、地元の人々との関わりを大切に、子どもたちへ還

元していけるようになってほしい。学校長が掲げる「ウェルビーイング」について、大人たちが満たされて幸せになることで、子どもたちも幸せになれるという考え方を大切に、誰もが無理なく参加でき堅苦しいと感じない、そんな活動にしていきたいと思う。

■協議

【協議の柱】

「学校の地域性や校区の広域性を踏まえた、持続可能な PTA 活動とは」

各校の報告から「できることから少しずつ」、「参加しやすく、負担にならない活動」、「工夫次第で活動は盛り上げられる」など、改めて今後の PTA 活動の在り方を確認することができた。また各校から、札幌聾学校の「ふれあいフェスタ」の取り組みは、コロナ禍の中断を経て現在、少しずつ良いものに発展させている事例、保護者の協力の下に廃品回収やイオン幸せの黄色いレシートキャンペーンに取り組む事例、コミュニティ・スクールの一環としてボランティアバンクを設置し、地域の方々からサポートをいただいている事例などが紹介された。

PTA 活動の目的は、子どもたちの健やかな成長を支えることとされている。PTA の目的を明確にし、すべての会員が共通の目標に向かって活動すること、社会の変化に合わせて、PTA 活動も変化させていくこと、役割分担やオンライン化等の工夫により、すべての保護者に無理のない範囲で参加してもらう等、PTA 活動を通して、保護者同士の交流や教職員、地域社会との連携などコミュニケーションを円滑にしていくことなどが、最後に確認された。

■助言

深町 友祐 氏より

○ 大会主題「共に学び生きる共生社会の形成とウェルビーイングの実現に向けて」に関して、ウェルビーイングとは「個人の権利や自己実現が保障され、身体的、精神的、社会的に良好な状態にあることを意味する概念」であり、教育を通じて向上させていくことが重要である。子どもたち一人一人が幸福や生きがいを感じられる学びをつくっていくことに、学校だけでなく保護者や地域の人々の役割は非常に大きい。子どもたちのウェルビーイングの実現に向けて、PTA 活動は大きな意義があるのではないかと。PTA は、学校の身近な応援団としての役割を果たすことが期待されている。

○ 聴覚障がい特別支援学校の児童・生徒数は減少傾向にある。学校規模は小さくなっているが、通学区域は広範囲である。PTA はどんな持続可能な取り組みができるのか、各校の取り組みから活発な意見交換が行われたが、話の中にその答えが示されていたように思われる。帯広聾学校の提言からは、

「保護者の居住地域、仕事の状況、教職員の負担など、様々な点に配慮した無理のない活動の展開」、「保護者、教職員との交流が図れる機会の設定」、「地域資源を活用した取り組みの工夫」、「保護者が参加しやすい時間、時期での活動の設定」などについて学ばせていただいた。

肢体不自由・病弱分科会

【司会者】

北條 俊介（真駒内養護学校 PTA 会長）

【助言者】

大西 修（道立特別支援教育センター教育課
肢体不自由・病弱教育室長）

【運営者】

吉岡 奈穂子（手稲養護学校 教頭）

【記録者】

白木 宜子（手稲養護学校 主幹教諭）

■提言

「共に学び生きる共生社会の形成とウェルビーイングの実現に向けて～子どもたちの社会自立の実現に向けたつながりの構築～」

旭川養護学校 PTA 会長 新崎弘恵

本校の PTA では、「厚生部」「広報部」「研修部」の 3 つの専門部により、幼児児童生徒のウェルビーイングや、よりよい学校生活、地域生活を目指して、各活動に取り組んでいる。

今回は、「研修部」の主に 2 つの活動を中心に提言する。1 つ目は特定非営利活動法人ゆいゆい理事長、野々村氏を招いて行った「座談会」である。「障がいのある方々の移動支援」を中心とし、事業所経営にあたっての人材確保の難しさや、人材不足によるサービスの縮減などについての情報提供があった。また、移動支援については、利用者の様々なニーズについて、声を上げて自ら行動していくことの大切さが語られた。

2 つ目は、今年度、初めて行った「福祉事業所説明会」である。生活介護、日中一時支援、移動支援、訪問看護、施設入所のサービスを展開している 5 つの福祉事業所に来校してもらい、保護者が興味のある事業所の説明を聞いて回った。参加後の保護者の多くは、「日頃疑問に思うことを直接伺うことができて大変有意義な説明会でした」などと感想を述べていた。

■協議

【協議の柱①】

「ウェルビーイングの実現に向け、子どもが自分らしく生きる力を育むための、コミュニティ・スクールの取組について」

○ コロナ禍で途切れた地域との関わりを再構築していく中、学校のことを知ってもらうことが重要。そのために地域の方にどのような協力を得るべきかを学校が把握することも重要。「この方だったら、このような学校の活動に対して応援してくれるのでは」という視点で学校運営協議委員を選定するのも良い。（北翔、真駒内、函館）

【協議の柱②】

「子どもたちが卒業後に暮らす地域が、共生社会となるための、保護者、学校、関係機関の取組について」

○ 移動支援は福祉制度の課題が大きく、各事業が先細りしている。保護者は移動に関する困り感があるため、各校とも保護者と連携を図って、事業所との連携を深めている。（豊成、三角山、旭川）

○ 障がいの状況や地域によって、居住地ではなく遠く離れた地域の施設を利用する場合や、外出が難しい子どもがバーチャルで様々な場所で活動をし、体験を増やす話もあった。子どもが自分の意思をどう伝えるか、子ども自身の意思を尊重することが大切である。（網走、手稲、室蘭）

○ 拓北養護では地域学習を通して、地域との関係性の再構築している。岩見沢は、全道から集まっている生徒の状況に合わせ、将来に向けた取り組みを実施。今後は情報発信の工夫や新しいコミュニティーを構築することが重要である。福祉事業所説明会などは取り入れていきたい。（岩見沢、拓北、山の手）

■助言

大西 修氏より

○ 「ウェルビーイング」は、身体的、精神的、社会的に良い状態であることを示し、短期的な幸せのみならず、生きがいや人生の意義など将来に渡る持続的な幸福を含む概念。多様な個人がそれぞれの幸せや生きがいを感じるとともに、個人を取り巻く地域社会が幸せや豊かさを感じられる良い状態にあることを含む、包括的な概念を示している。わが国では「獲得的ウェルビーイング」と「協調的ウェルビーイング」の両者のバランスが重要。

○ 提言の中に「継続的」「情操面においても」という点が、将来に渡る持続的な幸福であるというところがウェルビーイングなのではないか。

○ 予測困難な時代に合わせブラッシュアップしていくことが、ウェルビーイングの循環につながる。

○ 各学校の「自分から意思表示をする」、「いろいろな体験をする」、「学校や子どものことを知ってもらう」、「地域を知る機会」などの取組は、子どもや学校、地域、家庭のつながりが生まれ、それが社会のウェルビーイングにつながる。

- 就学中の今が「獲得的ウェルビーイング」と「協調的ウェルビーイング」のバランスが取りやすい時期であり、将来に向けて社会教育を通じた地域コミュニティの基盤にもなる。

知的障がい分科会(義務併置校)

【司会者】

福島 由紀子（七飯養護学校副校長）

【助言者】

奥田 裕幸（道立特別支援教育センター教育課
発達障がい教育室長）

【運営者】

伏見 浩之（余市養護学校教頭）

【記録】

鎌田 紫容子（余市養護学校教諭）

■提言

【提言①】

「子どもたちの『社会参加』のための保護者の役割」

札幌伏見支援学校 PTA 会長 小林 奈々
札幌伏見支援学校副校長 宮崎 宏美

コロナウイルス感染症以前の活動に戻りつつあり、PTA 茶話会の企画、広報誌の発行、PTA 主催の施設見学や講師招聘による学習会を実施した。会員の意向を聞き、研修したい内容を募りながら、取組の時期や回数を会員で話し合っている。

学校運営協議会で委員と教職員が様々な意見を出し合ったりして、学校と地域、PTA が一緒に活動に取り組んだ。地域の声を聞いたり、保護者の声を届けたりして、開校以来お世話になっている地域の店舗で活動に取り組むことができた。

保護者と学校、地域のつながりにより、将来の社会参加や豊かな生活の実現を願っている。学校運営協議会への参加を通して、人と人とのつながりの大切さを改めて感じた。共生社会の実現のために、多くの人に子どもたちのことや取組を理解してもらう働き掛けが必要で、将来のために、今の PTA としてできることは何か考えていきたい。

【提言②】

「ライフキャリアの視点から、児童生徒の発達支援を推進していくための学校の取組」～「つながり」を重視した教育活動の推進～

紋別養護学校 教頭 音羽 孝文

社会とのつながり、保護者・地域とのつながり、組織間のつながりを大切にしたい教育活動を推進している。

- 開発局との連携事業で、国道バイパス沿いの花

壇整備に参加している。雑草が多くなる夏季期間は、PTA も除草作業に協力している。

- 市民団体と地元企業、開発局との協働で、ペットボトル砂詰め作業・砂入りペットボトル配布活動を実施。生徒が「仕事」の責任と自覚をもって作業に取り組んでいて、市役所や警察、バス会社等で活用され、市民に喜ばれている。

- 地域の協力者と教職員が協働でもんべつ流氷まつりで氷像を製作し、児童生徒の作品で装飾した「滑り止め神社」を展示した。氷像に陳列した砂入りボトルを市民や観光客に配布し大好評だった。

■協議

【協議の柱①】

「地域と共働による児童生徒の発達支援を推進する取組について」（各校の取組について情報交換）

- コロナが明けて地域との連携がより発展し、子どもたちが作ったみつろうラップが町づくりに貢献し、町の観光協会が北海道福祉の町づくり賞を受賞した。子どもたち自身が取り組んだことが町の貢献に役立った実感ももてる学習になった。

- 作業学習のリサイクル班が、町内会や近所の家から古新聞や空き缶の回収を行っている。毎年リヤカーを引っ張って町内を歩いていると、町の皆さんに「ありがとう」と言っている。

【協議の柱②】

「共生社会実現に向けた学校運営協議会や PTA の在り方について」（各校の取組について情報交換）

- スクールバスの車内が混み合っていてトラブルが頻発したことがあったが、学校だけで対応を考えていたときは保護者から苦情などがあったが、PTA 役員に相談したところ、リーフレット作成のアイデアをもらい、保護者が読むことで添乗員に対する理解も変わる内容のリーフレットができ、PTA 役員と一緒に相談して作成して良かった。

- 学校運営協議会、町教育委員会、保健福祉の方々など、御協力いただける方々の幅が広がると、各方面からの意見を取り入れた教育活動になっている。

- 地域と協力したペットボトルの砂詰め作業や奉仕作業、窓拭きなどを行っている。地区センターで作品展をしたり、高校や町内会と公園の除雪作業や除草作業をしたりしている。

■助言

奥田 裕幸 氏より

- 役割、集団の中での地盤、自分の居場所、共に必要とする関係性を地域の方々と一緒に考えていくことが大切である。地域はこうあらねばいけない、保護者はこうでなければいけない、子どもは地域でこういう活躍をしなければいけないという押し付けではなく、自分の思いや願いで自分らしさを

発揮できる役割を作っていただきたい。

- 出会いや体験で何を学ぶかは一人一人違うので、様々な出会いや体験をさせてほしい。
- ウェルビーイングとは、目指すものというよりは、頑張って結果的に得られるものである。是非、こうした出会いや体験で、PTA 活動で子どもたちを支えていただきたい。

知的障がい分科会 (高等部単置校)

【司会者】

鈴木 喬 (雨竜高等養護学校 教頭)

【助言者】

岡森 博宣 (道立特別支援教育センター教育課
知的障がい教育室長)

【運営者】

奈良 吉高 (小樽高等支援学校 主幹教諭)

【記録】

武澤 直也 (小樽高等支援学校 教諭)

■提言

【提言①】

「我が子の成長を支えて」 ～学校と保護者の役割～

市立札幌豊明高等支援学校 PTA 会長 片山 一弘
本校では、令和 4 年度より「自分の人生をより良く生きようとする人を育て社会のウェルビーイングを実現する」という新しい学校目標を設定した。より良く生きようとする力を育むために、「自分を知り、大切にしよう」「まわりの人とつながろう」「経験を力にしよう」という 3 つの価値から、心の部分の成長に目を向けている。

私の息子は、小学 5 年生の時に特別支援学級に入り、本人の得意・不得意な所を先生がよくサポートしていただいた。本校でも様々な指導、サポートを受け、前にも増して笑顔も増え、前向きにチャレンジすることが多くなった。

学校では、生徒の課題克服に向けた取組を実践し、保護者と共有している。保護者は、参観日や行事に参加し、学校の雰囲気や取組を知ることが、日々の情報共有をしやすくしている。それぞれの役割を果たし、生徒の成長へと繋げている。

【提言②】

「ライフキャリアから見る、職業学科を主とする知的障がい特別支援学校」～本校のライフステージ上の役割～

北海道小平高等養護学校 教諭 牧野 文彦

本校は、職業学科がある知的障害特別支援学校であり、卒業後、仕事や生活をするために必要な 6 つの力を掲げ、段階的に学習を経験したり、寄宿舎で集団

生活に慣れたりすることで、大きな抵抗なく卒業後の生活に移行できるようにしている。卒業生の中には、「グループホームは、自由度が高い寄宿舎」と表現するほど、寄宿舎生活が有用だったことが考えられる。

社会に出て行くために、適切なライフキャリアを積み重ねることが重要であり、学校が社会へ橋渡しする役割も大切であると考えている。

■協議

【協議の柱①】

「高等養護・支援学校においてライフキャリアで重要視している取組について」

- 中札内村の「花と緑の村づくり」という活動に取組み、生徒が地域や学校のことを語る経験をしている。地域の方々から、「ありがとう。」「いつも助かっているよ。」の声を受けて、生徒が地域に何をしたいかを考える「学びのサイクル」を大事にしている。
- コミュニティスクールがきっかけで、子ども食堂に野菜の提供を行った。作業学習で作った野菜を提供し、贈呈式で「ありがとう。」と生徒に直接言ってもらえた。また、生徒が地域に出ていくことで、障がいのある子を知ってもらえる機会にもなり、このことは、特別支援学校の目的だとも感じた。
- 桜プロジェクトという取組みを行っており、作業製品を小学校の入学生にプレゼントしている。また、新得町のそば祭りでゴミの分別を行い、生徒の満足感がすごく高かった。活動中は、のぼりを立て、学校をアピールしながら行っている。
- キャリア教育の全体計画を見直した。授業の目標を職員で共有することができたり、どのような授業を行っているか見合ったりすることができた。

【協議の柱②】

「知的障がいの生徒のキャリア発達を支える家庭と学校との連携について」

- コロナ禍が明け、PTA 懇親会を行った。保護者同士で、悩みを共有することができた。また、先生方と今後気軽に相談できるという感覚を持った保護者が多かった。
- PTA 道東地区懇談会で授業参観や研修会を行い、就労について様々な保護者と情報交換することができた。

■助言

岡森 博宣 氏より

- 「自分を知る」ことは、大人でも難しいことであり、また、育ちが外から見えにくいからこそ難しい。
- 自己実現に向かう力を育むためには、自己選

択・自己決定する場を設定することが大切である。

- キャリア発達には、「本人の願い」が大切であり、本人がどうなりたいかを考え、学んでいくことの意味付けができるように支援したり、仕組みを作ったりすることが重要である。

- 生徒の言動の背景にある思いに寄り添い、ひも解きながら、内面を育てることが大切である。
- 支援者（保護者、教師等）のウェルビーイングを実現することが、子ども達の幸せを支える。

【令和 7 年度総会のお知らせ】

令和 7 年度

北海道特別支援教育関係 P T A 連絡協議会
総会・研究協議会

日 時：令和 7 年 5 月 10 日（土）10:00～

開催形式：オンライン形式

場 所：各校にて

事務局校（真駒内養護学校）より配信

※各障がい種の P T A 総会は、時期や方法について障がい種ごとに検討し設定します。

【第 25 回合同大会のお知らせ】

第 60 回北海道特別支援教育振興大会

第 50 回北海道特別支援教育関係 P T A 研究大会
第 25 回合同大会（オホーツク大会）

日 付：令和 7 年 10 月 4 日（土）

開催形式：オンライン形式

場 所：メイン会場 北見支援学校

サテライト会場 各特別支援学校

大会主管校：北見支援学校

※メイン会場から各校へ配信する予定です。

【令和 7 年度以降の本会の在り方】 （総会提案）

今年度総会での皆様からの御意見と、各障がい種別 PTA 連合会事務局の御協力により意見聴取させていただいた結果を踏まえ、役員会で協議してまいりました。総会でお諮りする内容（概要）を事前にお伝えいたします。総会当日に詳しい説明をいたしますが、ご意見やご質問などがございましたら、事務局までお寄せください。

（１）本会の名称変更

変更せず、現行の名称を使用する。

（２）大会の名称変更

令和 8 年度に大会名称の変更を行う。「北海道特別支援教育関係 PTA 連絡協議会 第○回研究大会」とする。

（３）大会の開催方法

1 日日程かつオンラインを活用した大会開催とする。

（４）顕彰に関して

「北海道特別支援教育関係 PTA 顕彰者選考要領」を策定し、「北海道特別支援教育振興大会 顕彰者選考要領」を廃止する。推薦までの手続きを本会事務局で行う。

（５）事業及び予算に関して

会費徴収額を暫定的に下げる。

【編集後記】

今号も、合同大会分科会の司会者、記録者の皆様方の原稿作成のご協力により、無事予定どおり完成、発行の運びとなりました。この場をお借りして、関係の皆様には感謝申し上げます。

さて 2025 年。合同大会は、途中、胆振東部地震や新型コロナウイルスのパンデミックにより中止の年もありましたが、来年度で 25 回目となります。第 1 回は 2001 年（平成 13 年）の開催でした。ミレニアムの当時から昨年 2024 年までの時代を大まかに振り返ってみますと、この四半世紀で道内の小中高校に通う児童生徒の数は 3 分の 2 に減少。学習指導要領が 3 回改訂。特別支援教育の正式スタート。胆振東部地震に新型インフルエンザと新型コロナを経験しました。今後さらに 25 年後までにどんな出来事が待ち受けているのでしょうか。何はともあれ、ウェルビーイングあふれる社会の実現と、SDGs 達成、そして特別支援教育を受けている子どもと卒業生の一層の幸福と社会での活躍を期待したいと思います。